

現代短歌分類辭典

第十三卷

津端 修 編纂

津 端 修 編 纂

現代短歌分類辞典

第 十 三 卷

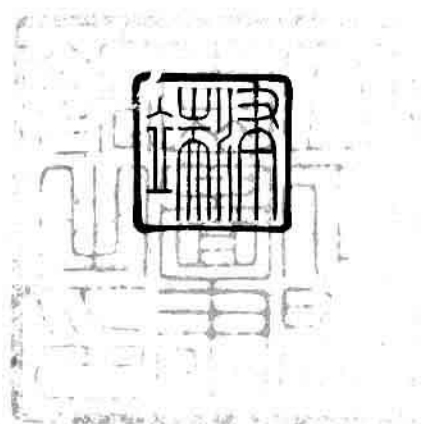
日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

現代短歌分類辞典

13



昭和四十一年二月二十日初版発行

定価四五〇円

著者兼
発行者
津端修

印刷所
津端修

東京都中野区上高田二丁目九

発行所
イソラベラ社

電話三八七局八四二九番
振替東京六七三四一番

目次

あさけ	四八五	歌数	一	頁数	朝明立ち	一	歌数	一	頁数	五
朝餉	一六二		二		朝けつゆ	一				〃
朝け風	一		五		浅けーど	一				〃
朝景色	三		〃		朝餉時	二				〃
朝餉しーつつ	一		五		浅けーども	一				〃
朝餉しーて	一		〃		朝且野(あさけぬ)	二				〃
朝餉白飯	一		〃		あさけーは	一				〃
朝餉しーをれーば	三		〃		朝化粧(あさけはひ)	五				〃
朝餉す	四		七		朝けはひする	一				〃
朝け杉叢	一		〃		朝けぶり	八				〃
朝餉すーらしーも	一		〃		朝明松原	一				〃
朝餉する	九		〃		朝餉まへ	二				〃
朝餉せーり	一		六		あさけみーて	一				〃
朝明空	一		五		朝けむり	二				〃

朝餉夕餉
 あざけらーしめーし
 嘲らーば
 あざけらーむ
 あざけらーれ
 あざけらーれーけり
 あざけらーれーつつ
 あざけらーれーて
 あざけり(名詞)
 あざけり(動詞)
 あざけり顔
 あざけりーし
 あざけりーたまへ
 あざけりーつつ
 あざけりーて
 あざけりーぬ
 あざける(終止形)

四 五 六 一 一 三 一 二 一七 一 一 一 二 三 一 一 五

七 〃 充 〃 〃 〃 六 宅 〃 六 〃 〃 〃 空 〃 〃 六

朝ーことの
 朝ーごとに
 朝ーごと
 朝東風
 朝木立
 朝五時ごろ
 朝五時
 朝小雨
 朝心
 朝心地
 あさけれーや
 浅けれーば
 浅けれーど
 浅けれ
 嘲けれ
 あざける(連体形)
 あざけるーや

七 八 九 一三 一 一 一 四 二五 六 一 七 七 五 二 一 一五

七 八 八 〃 〃 〃 〃 六 〃 〃 七 八 三 〃 〃 七 七

朝一ごとを
朝来の川
朝来の山
朝ごはん
朝こほり
朝こほろぎ
朝護摩
字高麗
朝来山
朝ごろ
麻衣
朝声
朝勤行
浅さ
あさざ
朝座
朝掃除せーり

歌数
二 一 二 一 二 一 一 一 一 一 二 一 二

頁数
六 〃 六 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

朝草履
朝冴え
朝坂
朝栄
朝狭霧
朝桜
朝ざくら花
朝ざくら路
朝酒
朝さざれ
浅沢
浅沢水
朝さへつり
朝寒
朝さむぎ
朝さむ水
朝覚め

歌数
一 二 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

頁数
三 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

朝雨	六六	一〇三	浅篠川	一	一	二三
朝雨あと	一	一〇七	朝芝	一	一	〃
朝雨ばれ	一	〃	浅芝	三	三	〃
朝さらず	三	〃	朝潮	二	二	〃
朝されーば	二	一〇六	朝凍	三	三	二五
朝散歩	一	〃	朝じめり	四	二	〃
浅し	一〇七	〃	朝じめりしーつ	一	二	二九
朝時雨	三三	〃	朝じめりしーて	三	三	〃
朝時雨しーて	一	一〇三	朝じめりせーり	二	二	二三
朝時雨す	一	二三	朝じめりせーる	一	一	〃
朝舌	一	〃	朝じめりーたる	一	五	〃
朝支度しーて	一	〃	朝じめる	九	三	二三
朝七時	一	〃	朝霜	一	一	〃
朝静	三	〃	朝食（あさけい）	一	一	二九
朝しづく	二	二三	朝食堂	一	一	〃
朝しづくする	三	〃	あさしらつゆ	一	一	〃
朝しづもり	一	〃	朝尻	一	一	二四〇

朝空	浅染	朝そばえ	朝園	朝蟬しぐれ	朝蟬	浅瀬波	朝せせらぎ	浅瀬砂がは	浅瀬	朝澄み水	朝雀	朝すず風	朝涼	朝姿	朝じろみゐーて	朝汁
二三九	一	一	一	一	一六	二	一	一	七六	一	五	一	二二	三	一	二
三	〃	〃	〃	三	〃	〃	〃	五	〃	〃	一四	一四	一四	〃	〃	一四
朝巷	浅茅生	浅茅原	浅茅野	浅茅ーがー原	浅茅ーがー庭	浅茅	朝路	朝谷	浅谷	朝立ちびと	朝立ちすれーば	朝立ちすーべき	朝立ち	朝太鼓	浅田	朝田
一	三四	一三	一	一〇	二	二四	一	九	一九	一	一	一	二五	一	二	二
一七	一八	〃	一八	〃	一八	〃	九	一六	〃	〃	一六	一七	〃	〃	〃	一七
																歌数
																頁数

麻布小衾（あさでこぶすま）	歌数	一	二三	頁数	朝戸出す	歌数	一	二六	頁数
浅照り	一	二三	朝戸出する	二	二	二	二六	二六	二六
朝照り	三	〃	朝戸出すれーば	一	一	一	二六	二六	二六
朝照す	一	〃	朝戸出前	一	一	一	〃	〃	〃
朝てる日	一	〃	朝通り	一	一	一	〃	〃	〃
朝電車	三	〃	浅土間	一	一	一	〃	〃	〃
朝門	一	三五	朝土間	二	二	二	〃	〃	〃
朝戸	六九	〃	朝鶏舎	二	二	二	二六	二六	二六
浅処	二七	二四	朝とよみ	一	一	一	〃	〃	〃
朝戸明け	一	二四	朝鳥	三五	〃	〃	〃	〃	〃
朝戸隠	一	二四	朝鳥ーのー声	二〇	二〇	二〇	二六	二六	二六
あざとき	一	〃	朝鳥の（枕詞）	二	二	二	二六	二六	二六
朝床	一〇二	〃	朝鳥群	一	一	一	〃	〃	〃
朝戸敷居	一	二五	朝ーな	一	一	一	〃	〃	〃
朝戸出	九〇	〃	朝な	三	三	三	二六	二六	二六
あさどて	一	二六	朝菜	五	五	五	〃	〃	〃
あさとでーごとに	一	〃	あざな	一	一	一	二七〇	二七〇	二七〇

朝な朝な	一五八	歌数	二七〇	頁数	六八	歌数	二九四	頁数
朝な朝なに	一九		二八三		一		三〇〇	
朝な朝な―の	七		二八五		一		〃	
朝な朝な―は	二		二八六		一		〃	
朝な朝な―も	二		〃		二		〃	
朝な朝な―や	一		二八七		一		〃	
朝な朝な―を	四		〃		一		三〇二	
朝なか	一		〃		一五		〃	
朝なが	一		〃		三七		三〇三	
朝ながめ	四		〃		一		三〇五	
浅流れ	二		二八八		三九		三〇六	
朝鳴き	二		〃		六		三〇九	
朝風	五二		〃		三、三二五			
朝なぎ海	一		二九三	作家表			三二〇	
朝風ぎ浦	一		〃	資料歌集表(三)			三三四	
朝渚	一		〃					
あさ渚はら	一		〃					

あさけ 【名詞】 【朝明】 【朝開】

〔万葉集 七〕―時の風吹かまく知らに阿胡の海の朝明の潮に玉藻刈りてな

赤ら雲湧きたちわたるこの朝け動員令は下りたりけり

岡本治弥太

電灯消えてとみにいぶせさ覚ほゆれ梅雨の朝明の飯食み居りて①

森山汀川

秋袷いざとりいでむ此あさけふきたつ空の風ぞ身にしむ

山県有朋

秋来ぬと廊下踏みつつ思ひたり素足すずしも朝明の風に

吉田恵弘

秋雨のはれの朝明のまさやけく山は見えむとけふ降るらしも②

長塚節

秋田あがたの得宝法師宿りゐる朝明すずしく雨ふりにけり③

結城哀草果

秋の山なく鳥もなしわが道は朝けの雲に末べこもれり④

釈 迢 空

秋ふかき十勝原野の馬宿に馬ひとつ見ゆ寒き朝けに

橋本徳寿

朝雲ぞけむりには似るこの朝けあわただしくも啼くほととぎす

若山牧水

朝明にて吾が脚かろしいちめんに白山一華咲く谷間なり

川田順

あさけ

あさけ

あさけの風にひえびえとゆれて露ながら白きをさかせぬ鉢のあさがほ

杉田 鶴子

朝明の霧こむる中より蝸は連れ鳴きとよむ端山裏山

平福 百穂

朝けの街にしづもる砂埃 女をみな水汲みにいでてゆくらし

平福 百穂

朝けはや引揚げの童らがその母と隣りの井戸に何かいふ声

中村 正爾

朝け早や港は空の明るさよ臨港山に沁み鳴く松蟬

中村 正爾

朝明待たず終夜ひとようづくみ死鳥の雄鴨がそばに雌鴨斃れぬ

北原 白秋

朝明までひたぶる降りし雨水があつまりよりてにこり来る川③

結城 哀草果

朝明まで降りゐし雨のあともなく陽に清々しきフレップの葉を摘む

八条 幹夫

朝けゆく衣手寒し雪きえぬ平群の山の白檜がもと

海上 胤平

朝明より荒れいだしたる南風空重々とゆく雲の層③

小宮 良太郎

朝けより出でて来ぬればしろたへの雪あきらけし最上川岸

佐藤 佐太郎

朝けより牛市が立ち牛いくつあつまりて来て啼くはさびし急

前川 佐美雄

朝明より海を瞻^{まも}れり下磯のホテルは潮をかぶりはじめぬ

朝けよりおもひ直して黒き麵麴^{ぎょうちやく}に牛酪^{ぎゅうちやく}ぬるもひとり寂しゑ⑤

朝けより来てガラス戸を叩きける鵲^{ぎよく}も友のひとりなりにし⑤

朝けより雲なくなればいたきまで山の光は額にし染む⑭

朝明よりけふは秋雨しくしくに濡るる玻璃戸の人を恋ひしむ

朝けより木枯すさぶ冬の空きびしく青く晴れとほりたる

朝けより声はればれし老いましてたゆまぬ母にころたよるも

朝けより草籠^{さうけ}をあめりこの秋の山くさ入るる竹のさうけを

朝けより冴えかへりつつ木原には雪は平に消残りにけり⑪

朝明より寂しき雨は降り居りて榎の木立に啼く鳥もなし⑥

あさけよりさむき雨ふり木蓮のつぼみのしづく枝つたひ落つ

朝けより石炭積機のひびきくる宿直^{しゆくちよくすまゐ}住居も既に久しき

あさけ

鈴江幸太郎

斎藤茂吉

若山喜志子

斎藤茂吉

吉野秀雄

清水乙女

金田千鶴

前川佐美雄

斎藤茂吉

斎藤茂吉

遠山繁夫

戸井田四郎

あさけ

朝明より戦ひつぎて今われは血を噴く矢傷数へがたしも

岡野直七郎

朝明より梅雨ぐもるらし微塵蠅のろく飛び交ふ膳の上低く①

谷 鼎

朝けより何ごころなくゐたりしに午飯時は過ぎてをりけり②

高田浪吉

朝けより飲みつぎてをればいつしらず吾子は学校より帰り来にけり

三池亥佐夫

朝けより野分の後のてりつけて蟬の声遠し白紫微花②

岡 麓

朝明より人にあひつつ 夜の更くる春しづけさに 戸をとざすなり④

釈 迢 空

朝明より日のくるるまできはひたちいそしむ人を見るぞ尊き⑦

斎藤茂吉

朝明より日の暮るるまで光さす山のいただきに雪残り居り

山口茂吉

朝明より日のくるるまで一日だに心しづめて吾は居りたし⑦

斎藤茂吉

あさけより日のくるるまでふりさくる蔵王の山の雲は常なし⑨

斎藤茂吉

あさけより日の暮るるまで見つれども蔵王の山は雲にかくろふ⑩

斎藤茂吉

朝明より降りたる冬の雨はれて庭木の枝を雫垂りおつ③

結城哀草果

朝けより降りはじめたる雪見れば春のはだれのごとくに降るも⑩

斎藤茂吉

朝けより　ほこりのにほひ鼻に沁み　しくしくに　腹の　ひもじかりけり　釈　迢空

朝明より水を渡らず来しことを峯^をづたひに行く道におもへり　山口茂吉

朝けより蒸あつき日とおもひしにゆふぐれどきに空荒れわたる⑪　斎藤茂吉

あさけより山をめぐりてわれの来し牧場は沢の鳴りおつる音　遠山繁夫

あさけより雪を降らしし雲の峯北方によりてそばだち居たり⑫　斎藤茂吉

麻畑は朝けの雨に撓へども青空見ゆも山のまうへに　依田秋圃

朝まだき朝けの風にふかれつつ小萩が露にぬれまくほしき　三浦守治

足柄の国の高山にわきし雲あさはしろく村にくだりぬ　遠山繁夫

あしたかの麓の草屋にはとりの枕になきし朝けわすれす　金子元臣

あしひきの山よりいでていきほへる朝明の川に春たつらしも⑬　斎藤茂吉

あすのあさけわが遠く行きしまらくを見ざらむ海のけふ荒れて居り　原阿佐緒

あさけ

あさけ

遊びたる彼の国ぬちをかへりみて朝明の海に吾はありける⑦

あたたかき春のあさけの砂はまにをさな子とわれと石投げあそぶ③

敵共はあさけの沼の立ち鴨の浮き足立ちぬ今ぞ打ちてむ

あたらしき馬糞まぐそがありて朝けより日のくるるまで踏むものなし⑥

新しく力はじめむこの朝け聖ごころのごとくしづけし⑪

あたらしく人移り来し隣家に子の泣くこゑもさびし朝けは

吾妻山飯いひで豊の山もこのあさけ近く見えわたる雪降りしかば⑩

淡雪のふりの静けきこのあさけ涅槃会の鐘をことしもききたり②

脂くさき朝けの口にふふみ来し梅干しの核たねは湯殿に吐き棄つ

あま雲のはるるあさけに見渡せば重なる峯の数ぞしられぬ

あまねくし霜のおきたるこの朝け日のさす畑に鳥あゆめり①

雨つぎし次の朝明を朝霧の晴間に分くる裾野花原

高田 浪吉

相馬 御風

小杉 放庵

斎藤 茂吉

斎藤 茂吉

石井直三郎

斎藤 茂吉

相馬 御風

中村 正爾

高崎 正風

松本常太郎

堀内 卓